

土地と人をめぐる声

斎藤美衣

中学生の頃、パール・バックの『大地』を読んでくらくらした。土地、とはただの地面ではなくてものすごく大きく生々しい肉体を有した生き物だと思った。同時に、それほど力を持つ大地は、はるか遠くて偉大すぎるものとしてわたしの前に立ちはだかっているようにも感じられた。

石畑由紀子『エゾシカ／ジビエ』は、現代に生きる人と土地のつながりを見せる一冊だった。

生きていた頃の傷あとそのままの革手袋に雪の結晶
 石畑と名乗りはじめた先人の両手のひら
 の血豆をおもう

石畑由紀子『エゾシカ／ジビエ』

作者は北海道に住む。タイトルにもあるように鹿をはじめとする動植物が、土地を共有する生命として、人間の暮らしの営みの中で道具や食べ物として深く関わっている様を柔らかくうたう。北海道を開拓した先人の歴史や息遣いに思いを馳せる。その中で、現代社会ならではの婚姻や生殖に絡むジレンマにも

触れる。

この歌集を読んで、土地と人をめぐる新しい声を聞いたと感じた。両手のひらに血豆を作って毎日土地に触れ、土地とともに生きた人たちと現代の都市生活者は異なる。石畑作品の土地と人をめぐる声はポリフォニックである。かつてはかき消されていた声も聞こえてくる。新たな声を聞いた一冊だった。

現代の歌集に見られる土地と人をめぐる声という点、柏崎驍二、本田一弘の二人を思い浮かべる。

くわんざうもぎしぎしも梅雨に茂りつつ
 みちのくはいまみちのくの息

郭公がこだましてをり包丁をもて時鳥に

殺されし鳥

柏崎驍二『北窓集』

『北窓集』では、言葉のトーンを抑えた豊かな韻律がみちのくの動植物、移りゆく季節に響く。土地が豊かな体を有した一つの生き物のようだ。『遠野物語』を下敷きにした郭公の歌では、古と今が歌によって通じる。

本田一弘作品は、土地の空気、産土への強

い思いが読み手にストレートに伝わる。

俺たちは雪の身ぬちを生きでゐる雪がふんねどすげねもんだな

本田一弘『あらがね』

ふくしまのゆふべのそらがかき抱くかな
 かなのこゑ死者たちのこゑ

本田一弘『磐梯』

雪の多く降る厳しい自然の中で、その厳しさすらも愛する。本田のうたう福島は、一人の人間のように多面的な顔を持つ生きものようだ。

柏崎驍二、本田一弘らの作品と石畑由紀子作品では、土地を巡る声の種類に違いがあると思う。柏崎、本田らの歌では、土地の声は力強い。歳月や歴史によって変換することのない恒久性を感じられる。石畑作品では、変わらぬ安定感や強さに加えて、揺らぎや弱い部分の声が掬い取られている。

そこからは六等星のひかりだらう一杯分の湯を沸かす音

次は花になりなよ 鍵を鍵穴に差し込む

次は鳥になりなよ

石畑由紀子『エゾシカ／ジビエ』

多様であり、弱さも内包していることを受け入れる時代と人の変化を詩歌によって声として表現しているのだ。